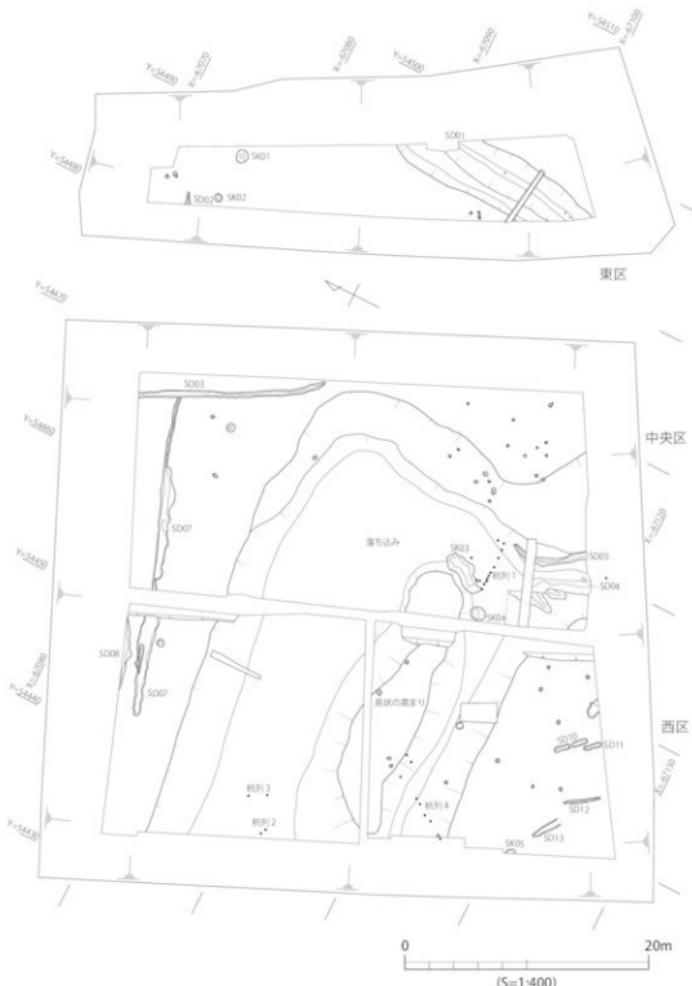


第3節 7区⑤の調査

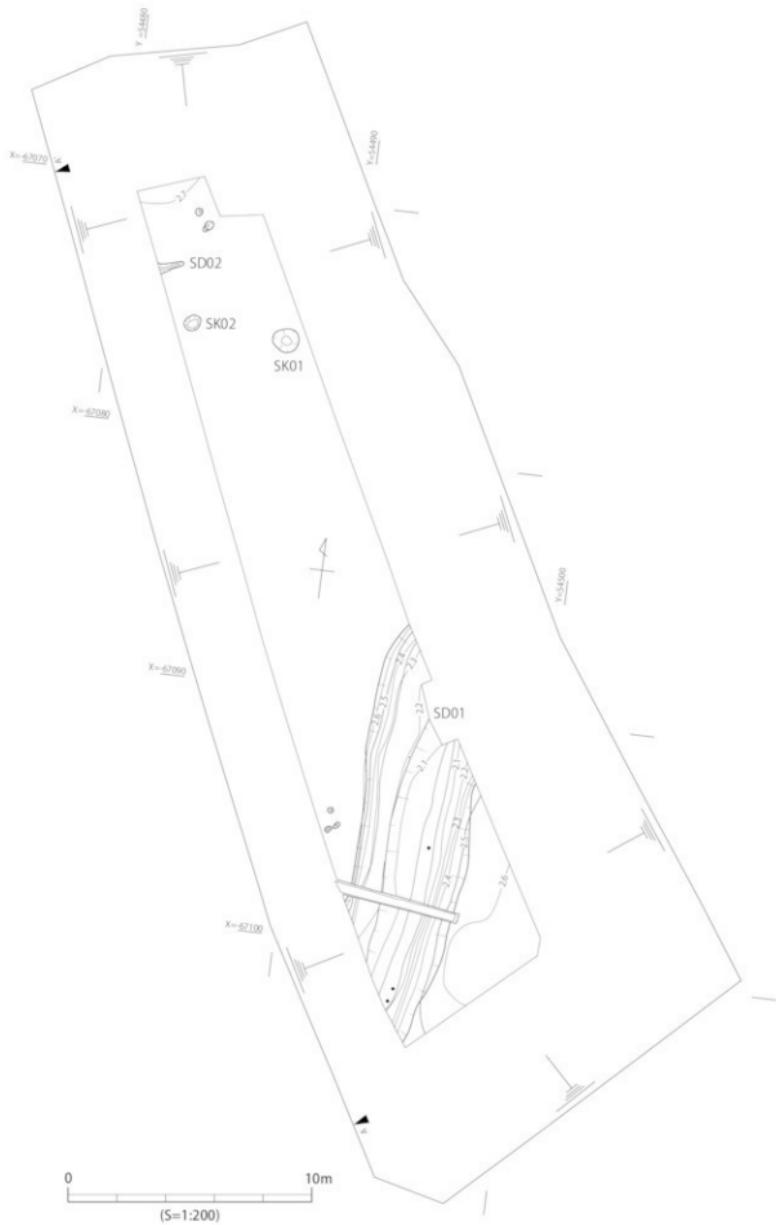
1. 調査の経過

7区⑤は、7区③の西側に位置する調査区で、平成21年度に調査を実施した。発掘調査面積は2,680m²である。

排土処理の面から、調査区を一度に掘り下げるのは困難であり、また、東側の方で工事が急がれたため、調査区を東区、中央区、西区の3つに細分し、東区から順に調査を行うこととした。



第152図 7区⑤全体図





第 154 図 7 区⑤東区西壁土層断面図

平成 21 年 5 月 19 日から、東区で重機による表土掘削を開始し、近世以降の水田耕作土や造成土、黒色腐植土層の大部分を除去した。5 月 27 日から人力による遺物包含層の掘削をはじめ、6 月 8 日から灰色シルト層上面で遺構検出作業を行った。東調査区では古墳時代中期の溝や土坑などを検出し、6 月 25 日にはこれらの調査を終え、調査区の埋め戻しを始めた。

東調査区の埋め戻し後、中央調査区において重機による表土掘削を行い、7 月 9 日から人力による遺物包含層の掘削を開始した。調査の過程で、調査区内に広い範囲で落ち込み状の地形があることが分かったため、土層観察用のベルトやサブトレーンチを設定しながら、遺物包含層の掘削を行った。遺物包含層では、落ち込みを中心に古墳時代中期を主体とする遺物が出土した。8 月末頃から 9月初旬にかけて灰色シルト層上面で遺構の検出・掘削・記録を行い、9月 7 日にはラジコンヘリコプターで空中写真撮影を実施した。これまでに調査区周囲の排水溝で灰色シルト層中から遺物が出土してたため、下層において遺物・遺構の確認を行うことを目的に、9月 8 日から灰色シルト層の掘り下げを行った。弥生時代後期後葉の土器群など一定量の遺物は出土したが、遺構は確認できず、9月 18 日に下層の調査を終了した。

西区は、9月 27 日から人力による遺物包含層の掘削を開始した。この調査区でも中央区で検出した落ち込みが続いているため、土層ベルトやサブトレーンチを設定しながら調査を進めた。落ち込みを中心に古墳時代中期の遺物が出土している。11月中旬で灰色シルト層上面の遺構・地形測量・調査区の写真撮影を終えた。11月 16 日から下層における遺構・遺物の有無を確認するためシルト層の調査を行ったが、土器が若干出土したのみで、11月 20 日に掘削作業を終了し、11月 25 日に調査区壁面の土層を記録して、7 区⑤について全ての現地調査を終了した。

2. 基本層序（第 154・162・163 図）

調査区の基本層序は大きく見て 5 つに大別した。

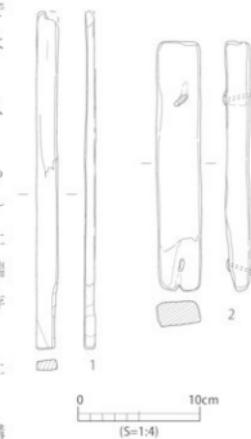
I 層は、水田耕作土など近世以降に堆積したと考えられる層である。このうち第 154・162・163 図の I - 5 層は河川の氾濫による堆積層と考えられ、他の調査区でも同様の層が認められる。

II 層は、未分解の植物質のものが堆積した黒色系の腐植土層で、「オモカス層」とも呼ばれる。他の調査区でも同様ものがある。

III 層は、IV 層と比べやや灰色みを帯びた粘質土層で、部分によっては径 1 cm 大の白色～黄褐色の砂質土粒塊を含んでいる。古代～中世の耕作土と考えられる層で、須恵器片などが少量ながら出土している。なお、第 154・162・163 図の土層のそれぞれの北端付近で畦状の高まりが観察でき、これらを結ぶかたちで畦畔が存在した可能性がある。

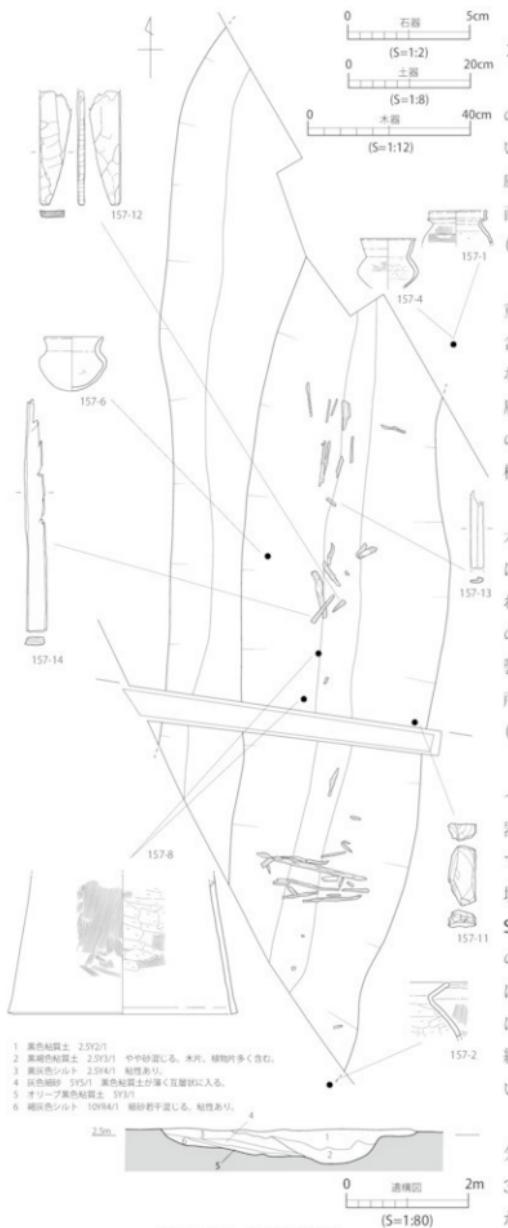
IV 層は、主に古墳時代の遺物を含む層である。黒色系の粘質土を中心とするが、落ち込み内には砂質土や砂も堆積している。

V 層は灰色シルト系堆積層で、前述したようにこの上面で遺構を検出している。この調査区では弥生土器が若干だが出土しており、中央区では弥生時代後期後葉の土器群も存在している。



第 155 図 7 区⑤ 東区

II・III 層出土遺物



第 156 図 7 区⑤ SD01

3. 東区の調査

前述したように 7 区⑤は、3 つの区に細分して調査を実施しているが、遺構の連続性などを考慮して、本節では東区と、中央・西区に分けて記述する。

(1) II・III 層の調査 (第 155 図)

本調査区では II 層の大部分は重機で除去し、III 層から遺物包含層とみなして調査している。なお、III 层上面及び III 层下面 (IV 层上面) では遺構埋土と基盤層の判別は困難であると考え、遺構検出作業は行っていない。

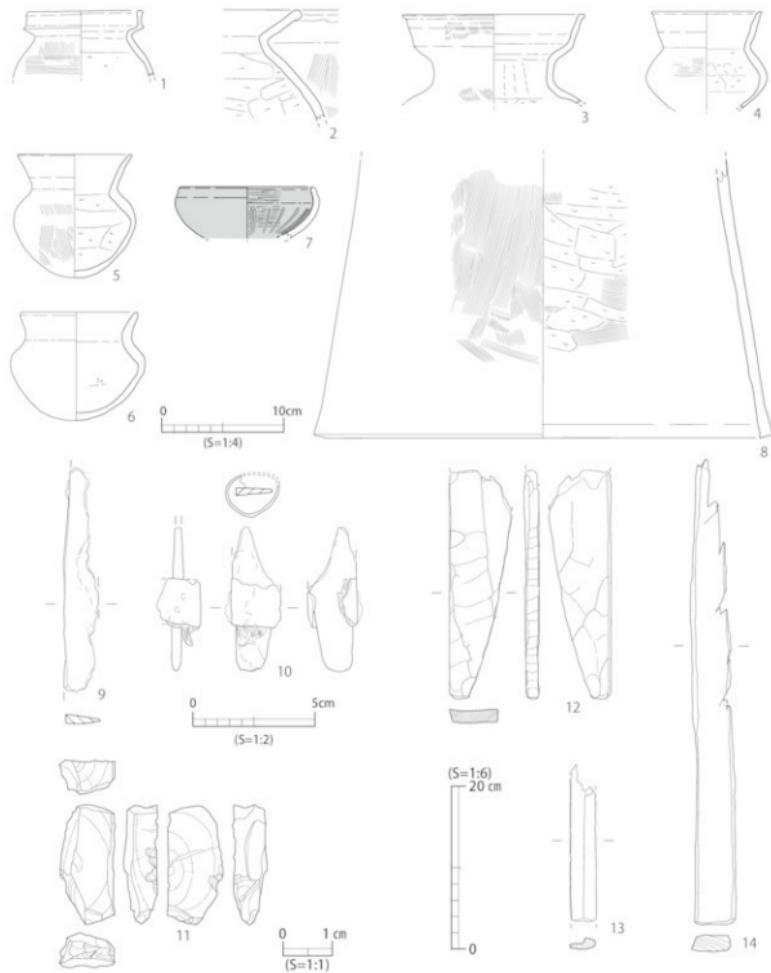
1 は、II 层から出土した板状木製品で、基部は方形で、頭部は丸みを持ったかたちに加工されている。2 は、III 层出土のもので、厚みのある方形の板状木製品である。両端に寄った 2 か所に鉄釘が打ち込まれている。

(2) IV 层～V 层上面の調査

東区では IV 层の堆積は 5 cm ～ 10cm と薄く、遺物は古式土師器・土師器が若干出土したのみであった。V 层上面では溝・土坑などの遺構を検出している。

SD01 (第 156・157 図) 調査区の南側で検出された、南北方向にのびる幅約 4 m の溝で、北側は隣接する 7 区③の SD01 と連続し、南側は調査区外にのびている。

土層の堆積は大きく 2 段階に分けられる。まず、第 156 図の 3 ～ 6 层が堆積し、それらを切るかたちで 1・2 层が堆積している。



第157図 7区⑤SD01出土遺物

溝の掘り直しがされたものと推測でき、この遺構の西岸がステップ状になっているのも掘り直しと関連するものと考えられる。埋土には砂などの堆積が見られることから流路跡と考えられる。本調査区では水流の方向は判断できなかったが、7区③の調査では北から南への流れていた、とされている。

第157図はSD01の埋土中から出土した遺物である。

1は複合口縁の甕で、古墳時代前期でも新しい様相を示す。2は単純口縁の甕で口縁端部が外側に折り返されている。3は退化した複合口縁の甕、4～6は小型丸底甕である。7は高環の环部で、

内外面にベンガラが塗布されている。

3~7は古墳時代中期に属する。8は瓶形土器である。

9~10は刀子で、9は刃部側、10は茎から刃部基部にかけての破片である。10には鍔金具や柄の木質が残っている。

11は碧玉の管玉未成品で、工程上では細削段階のものである。

12~14は板状木製品である。12は、一方の長側縁が斜め方向のび、端部がすぼまつた形になる。11は片面に段を持ち、12は片側の長側縁に多数の切り込みが入っている。

遺物からSD01は古墳時代中期の遺構と考える。このことは7区③の調査成果とも矛盾しない。

SK01(第158図) 調査区北側、L 17 グリッドに位置する、径1m、深さ0.65mの不整円形の土坑である。出土遺物はないため、時期は不明である。

SK02(第158図) 調査区北側、L 17 グリッドに位置する、長径0.75m、短径0.7m深さ0.05mの不整椭円形の土坑である。出土遺物はないため、時期は不明である。

SD02(第158図) 調査区北側、L 17 グリッドに位置する。現存長1m、幅0.2~0.4m、深さ0.03mの溝で、西側は調査区周囲に掘った排水溝で切られている。出土遺物はない。中央区・西区で検出されたSD07の延長上にあり、調査区壁面で観察できる「畔状遺構」の推定部分とほぼ重なることから、これらに関連する可能性を考えておきたい。

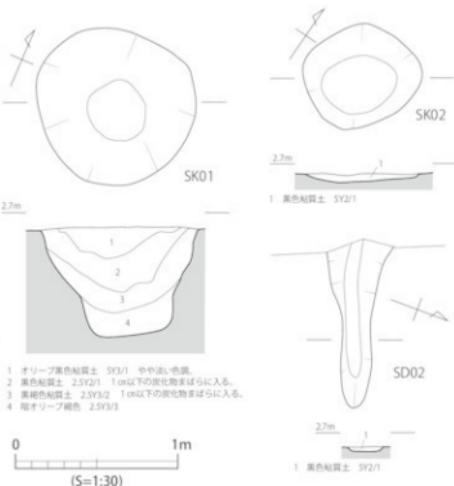
出土遺物(第159図) 1は古式土器の壺で、内傾する口縁部にはヘラ状工具の刺突による羽状文が、口縁部下端に突出部には刺突文が施されている。また頸部にも刺突文や円形竹管文が見られる。西部瀬戸内系土器に見られる器形をしているが、文様の点では異なり、在地との折衷形態と考えられる。2は瓶形土器の把手である。

(3) V層の調査(第160図)

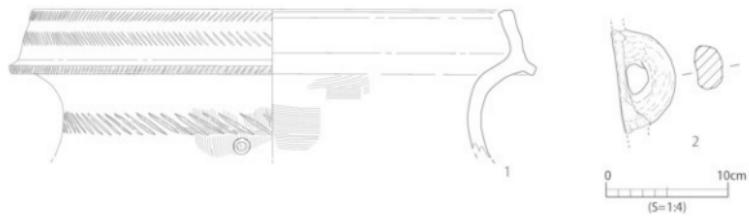
東区ではV層の面的な発掘はしていないが、調査区周囲に排水溝を掘削した際に若干の弥生土器や木製品がV層から出土している。

1~5は弥生時代後期~古墳時代前期頃の土器である。1は壺、5は鼓形器台で、V-3様式のものである。2は壺の肩部とみられるもので、幅広の突帯に半截竹管文が施されている。3は装飾壺の胴部で、爪形の刺突文や平行直線文が入る。4は低脚壺である。

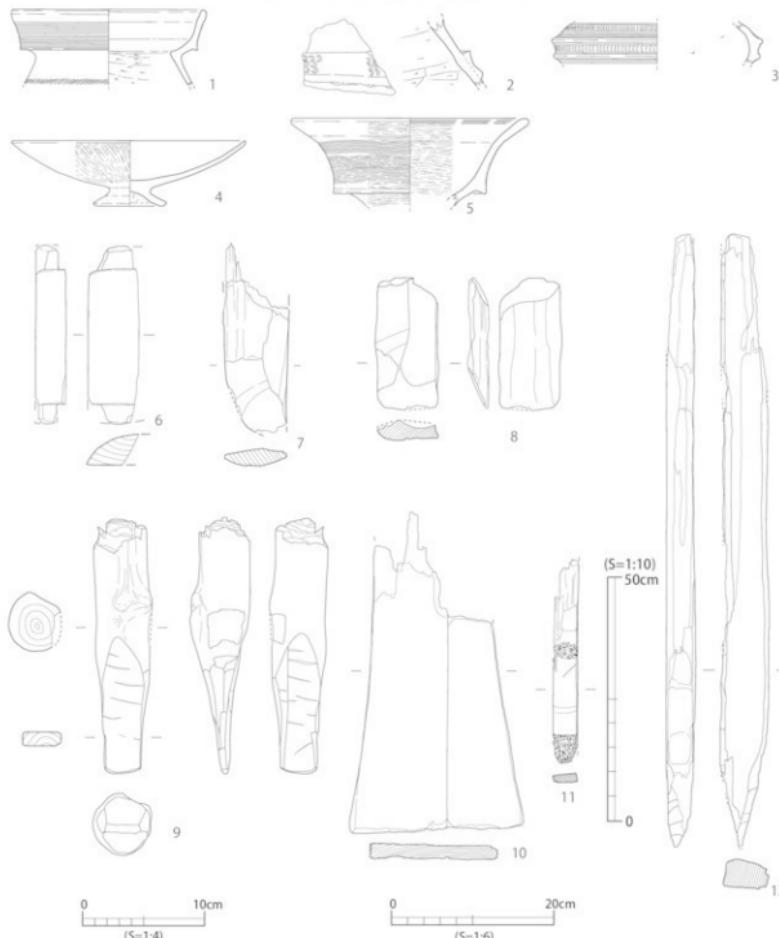
6~12は木製品である。6は断面が扇形しており、両端部にはぞ状の突出を持つ。7~8は木材の加工時に出た削り屑であろうか。9は丸太材を加工したもので、一方はマイナスドライバーの先端のように作り、もう一方は周囲から切り込みを入れて切断している。10~11は板状の木製品



第158図 7区⑤ SK01・02, SD02



第159図 7区⑤東区IV層出土遺物



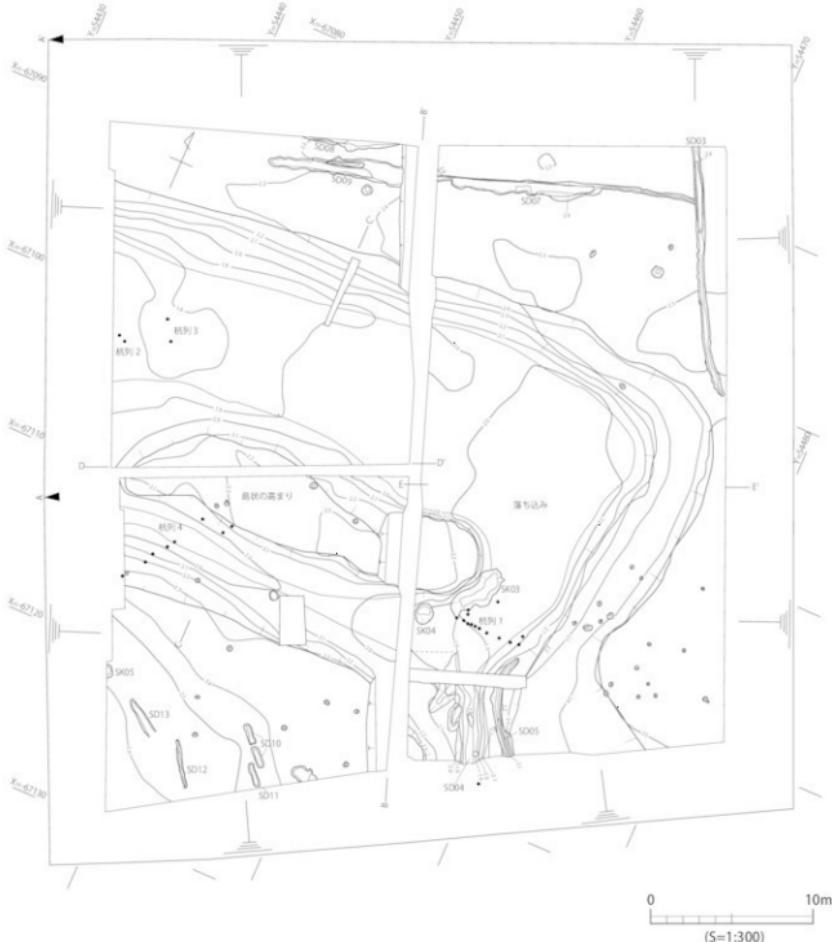
第160図 7区⑤東区V層出土遺物

である。12は現存長が130cmの大型の杭で、断面は不正長方形になっている。

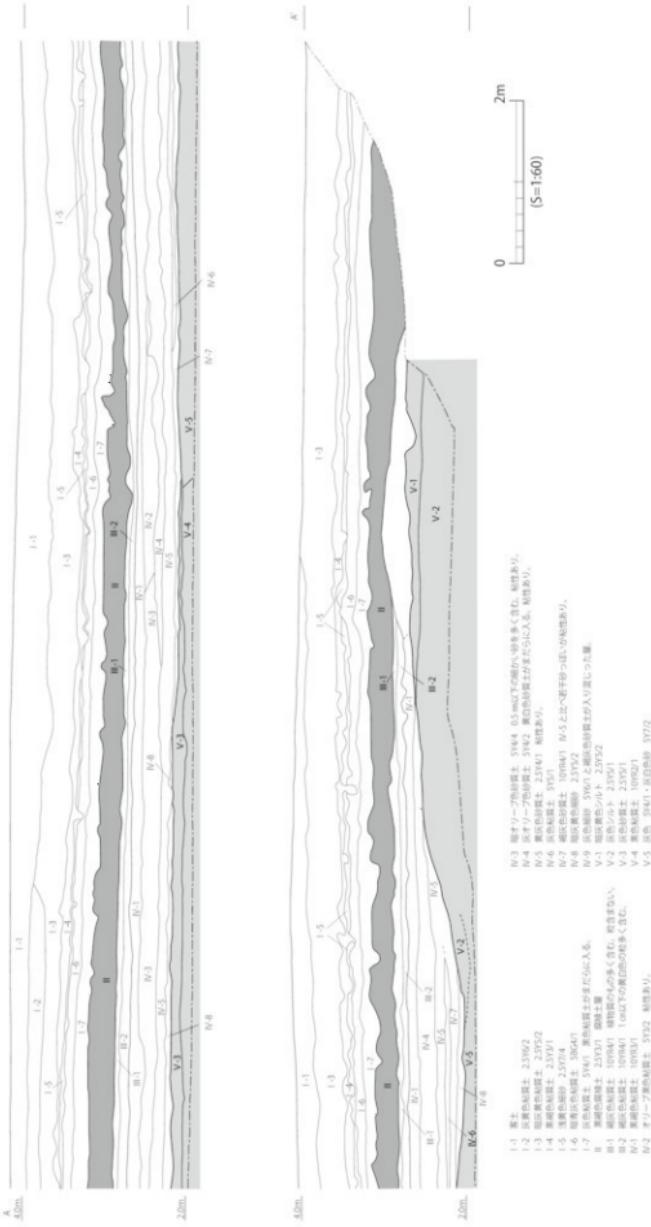
4. 中央・西区の調査

(1) III層の調査(第165・166図)

中央・西区においてもII層の大部分は重機で除去し、III層から遺物包含層とみなして調査している。なお、III層上面及びIV層下面(IV層上面)では遺構埋土と基盤層の判別は困難であると考え、遺構検出作業は行っていない。



第161図 7区⑤中央・西区遺構図



第162図 7区⑤中央・西区A-A'土層断面図



第163図 7区⑤中央・西区 B-B' 土層断面図



第 164 図 7 区(5)中央・西区 C-C'・D-D'・E-E' 土層断面図

Ⅲ層では古代を中心とする遺物が出土している。

1・2は弥生土器である。1は注口土器の把手で、断面形は丸い。2は壺の肩から頸部にあたるものと思われ、幅広の突帯に半截竹管文が施されている。東区V層で出土した第160図2と類似しており、同一個体の可能性がある。1・2は本来下層に含まれていたものが、耕作等による土層の攪拌のためにⅢ層に入り込んだものと推測される。

3～12は古代の須恵器である。3は壺蓋で、宝珠状のつまみが付いていたと考えられる。外面には「邊」と墨書きされている。奈良時代のものである。4も壺蓋であるが、天井部外縁に断面台形状の径の大きい輪状つまみが付くもので、当地域ではあまり見られない器形をしている。5～7は环身である。5は体部が内湾しながら立ち上がるもので、岡田編年の出雲Ⅲ～Ⅳ期に、6は底部周縁よりも内側に高台が付き、体部が直線的に立ち上がるもので、出雲ⅣA期に位置付けられよう。7は底部を欠いており、体部が直線的に立ち上がる。8は皿で、体部は外傾しながら、直線的に立ち上がっている。底部内面には墨書きで「林」の文字が記されている。9・10は壺の口縁部とみられる。11・12は甕の胴部片で、11は外面は平行タタキ、内面は同心円の当具で調整され、12は外面に平行タタキ目、内面下側に同心円当具痕、上側に放射状当具痕が残る。

13～17は古代末から中世の土師器皿である。13は体部が少しだけ内湾気味に立ち上がるもので、口径と底径の差はあまり大きくない。14は、高台の付くもので、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反している。15は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は少し外反している。16は体部が内湾気味で、口径と底径の差が大きいもの、17・18は体部が内湾して立ち上がり、口径と底径の差は大きくない。13は広江編年の第2段階で11世紀、15は第2～第3段階（古）で12～13世紀、14・16は第3段階で12世紀頃、17・18は第4段階（古）で13世紀に位置付られる。

19は砥石で、正面と2側面、片側の小口面の4面で研磨面が認められる。

20～22は木簡状の板状木製品で、20は端部付近に紐を通すための孔が穿たれている。赤外線カメラを用いて観察したが、文字は認められなかった。

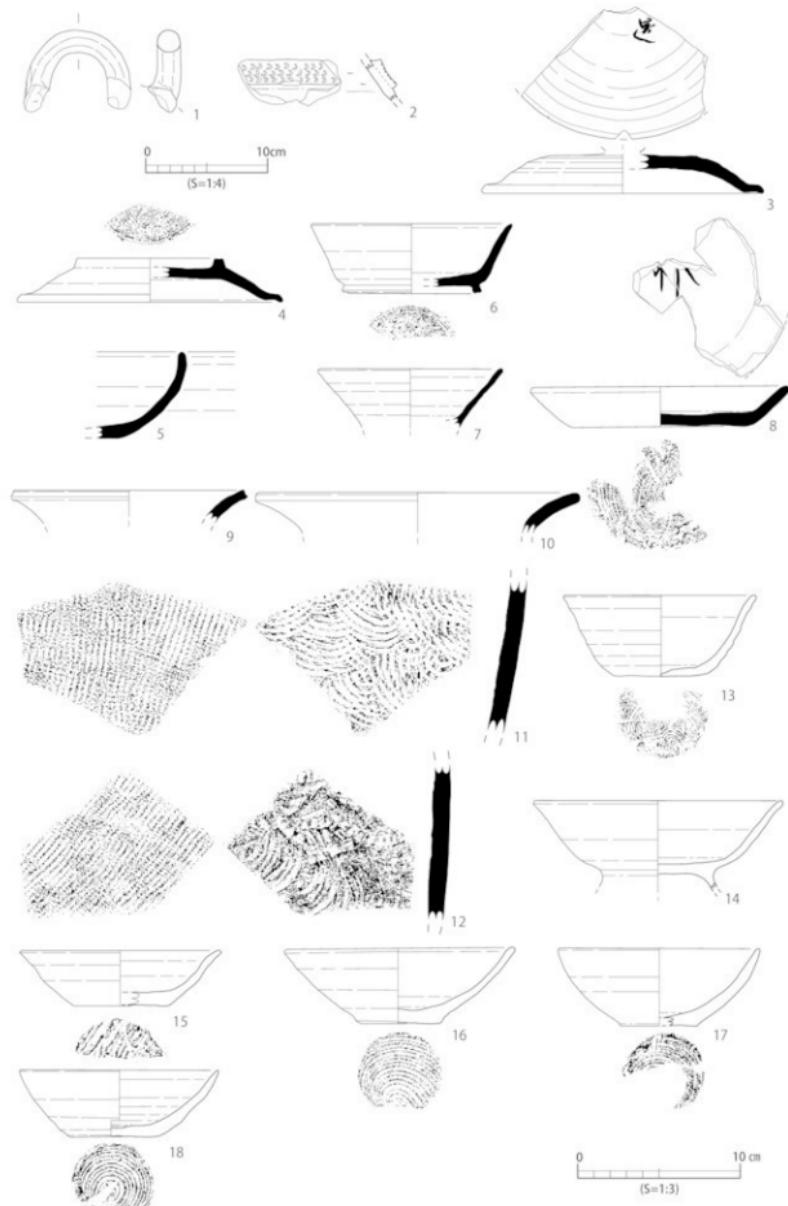
（2）IV層～V層上面の調査

IV層は古墳時代を中心とする遺物包含層である。この層を掘り上げたのちV層上面で溝・土坑などを検出した。なお、中央・西区では、V層上面は平坦ではなく、中央部で落ち込み状になっていた。

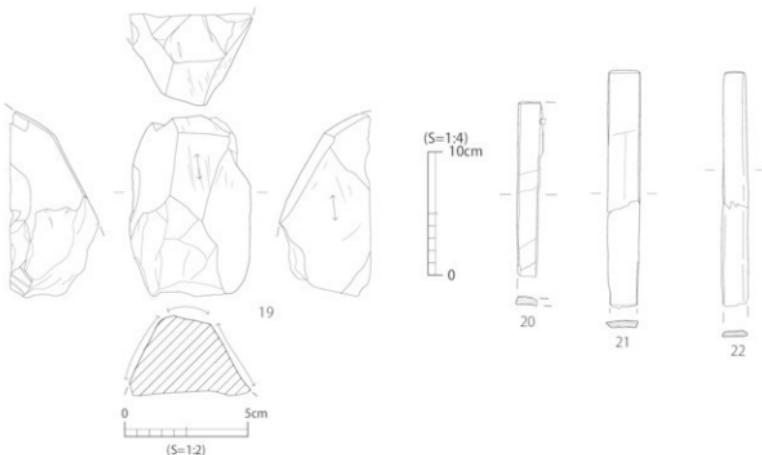
①検出遺構

SD03（第167図） 中央区の北東側、K15・K16・L15 グリッドに位置する溝で、N -27° -W 方向にのびている。現状で確認できた長さは 15.3m、幅は 0.4m、深さは 0.06m で、北側はさらに調査区外にのびる。SD07 と切り合っているが、前後関係は判断できなかった。遺物は小片のために図示していないが、古墳時代の土師器片や、古代末～中世の土師器壺もしくは皿の破片が出土しており、遺構の時期は古代末～中世と考える。遺構の性格については、水田に伴うものか、もしくは畦畔の構築に伴う可能性が想定される。

SD07・SD08（第167図） SD07 は中央・西調査区の北側、K13～15 グリッドに位置する溝で、N -70° -E 方向にのびている。SD03 の西側から長さ 26 m で確認され、幅は 0.2～1.3m、深さは 0.08m である。SD08 は、SD07 の北側に平行する溝で、北側は調査区周囲の排水溝で切れており、確認できた長さは 6 m、幅は 0.75m、深さは 0.1m である。SD07・08 では弥生土器・土師



第165図 7区⑤中央・西区III層出土遺物（1）



第166図 7区⑤中央・西区Ⅲ層出土遺物（2）

器片が出土しているが、この遺構に直接作うものとはいえず、また、小片であるため図示しなかった。SD07・08は、調査区壁面で観察される「畦状遺構」の想定箇所とほぼ重なっていること、調査区壁面の土層（第162・163図）では「畦状遺構」下の片側、あるいは両側に落ち込みが確認でき、これらに対応する可能性が高いことから、畦畔の造成に伴う整地段階で掘られた溝であるか、畦畔に先立つ地割等に伴う溝と推測される。遺構の時期は、Ⅲ層の出土遺物から古代～中世前半と考える。

SD10～13（第168図）西調査区の南側、G13・G14 グリッドに位置する。

SD10は2本の溝のようにも見えるが、直線的に並んでおり、本来一連のものであった可能性が高い。N-44°-W方向にのびており、規模は、全体の長さが2.9m、幅は0.4m、深さは0.06mである。

SD11は、SD10の南西に位置し、N-42°-W方向にのびており、SD10とほぼ平行する。長さは1.5m、幅は0.3m、深さは0.05mである。

SD12は、SD10から約4.5m西に位置する。N-34°-W方向にのびており、SD10に対し少し東に振れている。長さは3m、幅は0.35m、深さは0.05mである。

SD13は、SD11から約1.5m北西に位置している。N-56°-W方向にのび、SD10に対してやや西側に振れている。長さは2.5m、幅は0.5m、深さは0.03mである。

SD11から弥生時代後期の土器片が、SD13から土師器片が出土しているが、小片であり、この遺構に直接作うものか不明である。遺構の性格は不明であるが、4区などで畝間の溝が検出されており、それらに類するものかもしれない。

SD04・05（第169・170図） SD04は中央区の南側に位置し、落ち込み状地形の南東隅にとりつくかたちに掘られた溝である。南側は調査区外にのびており、現状で確認できた長さは6.5mである。溝の幅はどのようにとらえるか問題があるが、落ち込み上端の延長上有る緩やかな傾斜変換線で計測するなら約12m、SD05の東側の傾斜変換線でとらえるなら約4m、内側の急な傾斜がはじまる変換線で計測するならば約2mということになる。底面の標高は、第169図A-A'.

で 1.86m、B - B' で 1.78m である。埋土には、黒色粘質土と細砂が見られることから、滯水状態のときと流水状態のときがあったと推測される。

SD05 は、SD04 東側の斜面に弧状にのびる溝で、長さは 6.2m、幅は 0.6m、深さは 0.3m である。埋土として黒褐色の細砂・砂質土が堆積している。

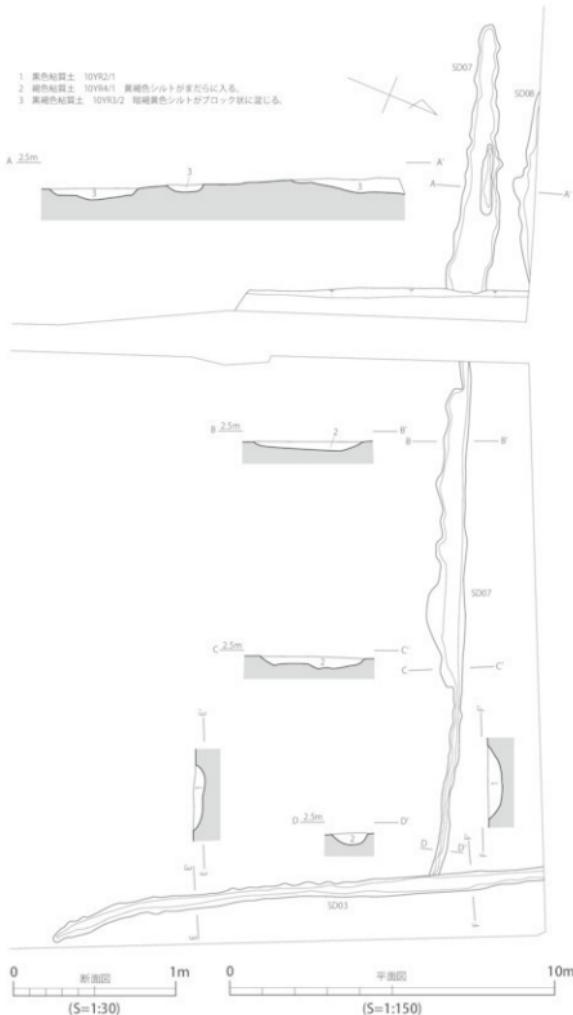
SD04・05 で出土した遺物を第 170 図に図示した。

1 は古式土師器の甕で、口縁端部が肥厚していることから、草田 7 期のものと考えられる。

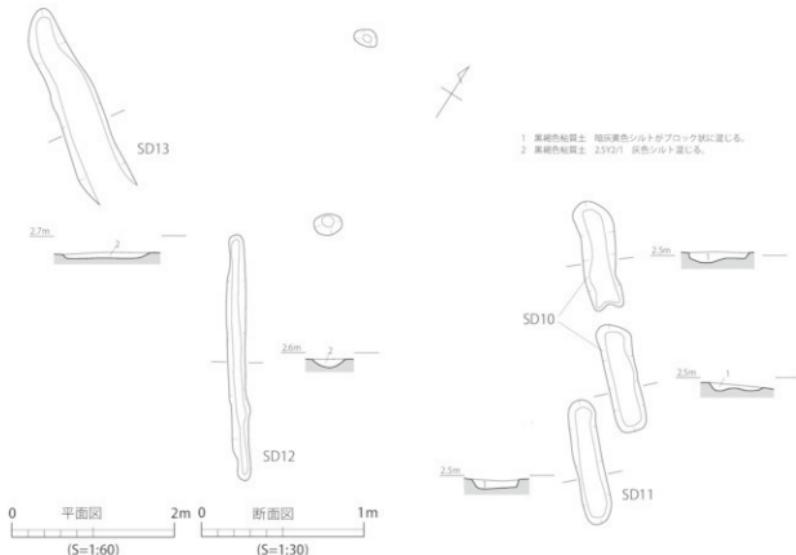
2～7 は土師器である。2 は退化した複合口縁の甕で、SD04・05 で出土したものが接合している。3 は小型丸底甕で、口縁部よりも胴部最大径の方が少し大きい。4～6 は高环である。4・5 は体部と口縁部の境に稜を持つものであるが、

4 は環部と脚部を別々に製作したものを探接続したものであるのに対し、5 は環部底に塊状の粘土を充填して脚部と接続している。6 は脚部の低い高环である。7 は甕で、底部外面には粗いヘラケズリ痕が残る。4・5 は外表面全体及び環部内面、6 の外表面全体、7 の内外表面全面には赤色顔料（ペンガラ）が塗布されている。2～7 は古墳時代中期のものと考えられる。

8・9 は須恵器である。8 は口縁端部を欠くが、大谷編年の出雲 1 期に遡る可能性を持つ。底



第 167 図 7 区⑤ SD03・07・08



第168図 7区⑤ SD10～13

部には右回転のヘラケズりがされている。9は頭で、口縁部上・下段に波状文が施されている。これも1期のものであろう。

10～12は木製品である。10は矢板で、SD04の東側斜面の下端付近に打ち込まれていたものである。12は、SD04の東側斜面下端に沿うかたちで出土した。長楕円形の断面形を持つ棒状の木製品で、何かの柄に使用されたものかもしれない。材はエノキ属である。11はSD04の推定延長上の土中に刺さって出土した矢板で、SD04の埋没後に打ち込まれたものと推測する。

出土遺物からSD04・05は古墳時代中期に属すると考えられる。

落ち込み状の地形（第164・171～174図） 中央・西区の東西約40m、南北約24mの範囲で、V層上面が落ち込んだ状態になっていることが確認できた。落ち込み底面の標高は1.8～2.0mで、落ち込み上端との比高差は0.3～0.5m程度である。落ち込みの中央から南に偏った位置には、長さ24m以上、幅7mの島状の高まりがあり、このもっとも高い部分の標高は2.3mである。落ち込み埋土には砂の堆積も部分的に見られることから、水が流れていた時期もあったと推測される。

遺物は落ち込みの全体で出土しているが、北側から東側にかけて多く、南側はやや少ない。北西側では流木が埋土中でまとまって検出された部分があり、流木の多くは落ち込みに対してほぼ直交する方向で出土している。

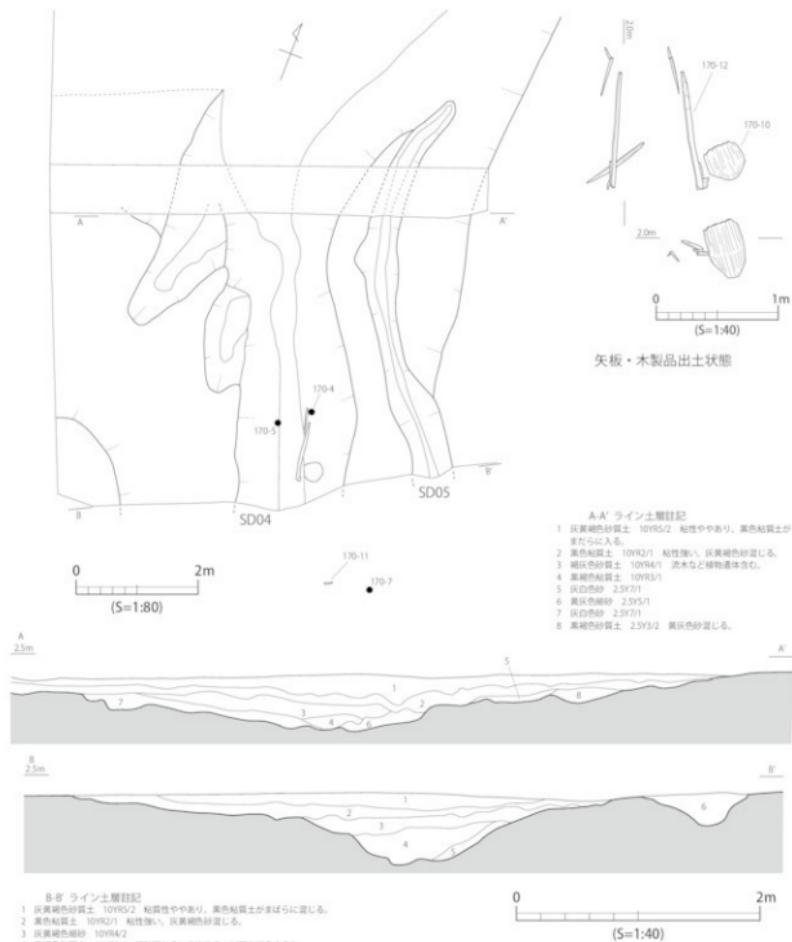
第172～174図は落ち込みから出土した遺物である。

1・2は弥生土器である。1は器台で、平行直線文や貝殻による刺突文、羽状文が巡る。2は平底の底部で、焼成後に穿孔されている。

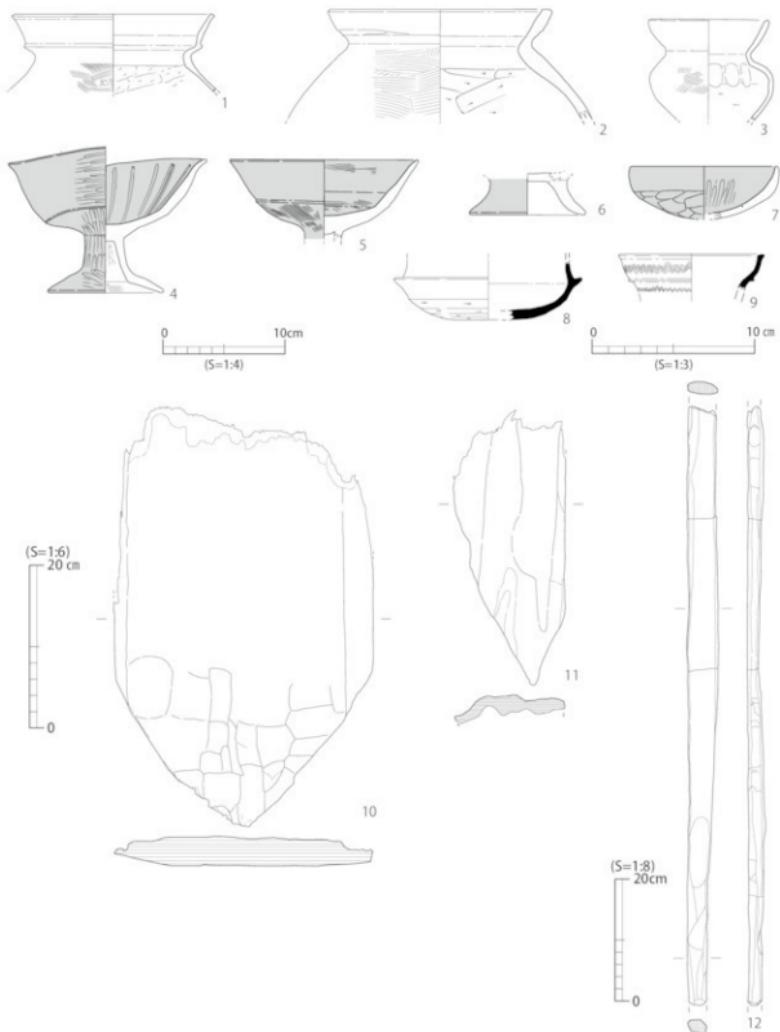
3・4は古式土師器の甌、5～11は土師器の甌である。1は、少し内傾気味の口縁部に1本線

の崩れた波状文が部分的に描かれている。つくりは全体的にシャープさを欠いている。小谷3式以降のものか。4は口縁端部が面取りされたもので、草田7期頃のものと考える。5～39は土師器である。5～7は口縁部が退化した複合口縁のもので、段部は外面に弱い稜線があり、内面はわずかにくぼむ程度である。8・9は口縁部が内湾気味のもので、端部が内側に肥厚している。10・11はやや外反気味の口縁部をもつ。

12は古式土師器の壺で、口縁部は内傾している。13～15は土師器の壺で、13・14は退化し



第169図 7区⑤SD04-05



第170図 7区⑤ SD04・05出土遺物

た複合口縁を持つもの、15は肩部にヘラ状工具の刺突による羽状文が施されたものである。

16～21は土師器の小型丸底壺で、21は外面全体と口縁部内面に赤色顔料（ベンガラ）が塗布されている。

22～34は土師器の高壺である。22～24・26～30は壺部と脚部を接続する際、壺部底面に粘土塊を充填したもので、22～24・26・29には粘土塊に刺突痕が見られる。これに対し25は別々



第171図 7区⑤落ち込み遺物出土状態

に作った环部と脚部を貼り合わせて作られている。22・23は外面全体及び环部内面に赤色顔料(ペンガラ)が塗布されている。31～34は脚部のみのものである。33は外面に指頭圧痕が残り、脚裾の開きが小さく、他と比べてつくりが粗雑な印象を受ける。

35は古式土師器の低脚环、36・37は土師器の环である。36は半球形の器形のもの、37は口縁部と体部の境に沈線があり、口縁部が屈折して直立するものである。

38・39は古式土師器の瓶形土器で、ほぼ同じ地点から出土しており、同一個体の可能性がある。38は上部に横方向の把手をはめ込んだ孔が穿たれている。

40～44は須恵器である。40・41は环蓋で、口縁端部に段差を持つもので、1期遡る可能性がある。42・43は底部に回転ヘラケズリがされておらず、大谷編年の出雲5期のものと考えられる。44は大型の罐で、陶邑編年のTK23型式以前のものとみられる。

45～47は砥石で、45・47は柱状の断面形を持つものに対し、46は扁平な断面形のものである。

48は管玉で、両面から穿孔されている。被熱による貝殻状の剥離が多数認められる。色調は青黒色であるが、被熱の影響で変色したかもしれない。石材は不明だが、被熱により変色したものとすれば、碧玉の可能性もある。49はガラス小玉で、色調は濃い青色をしている。

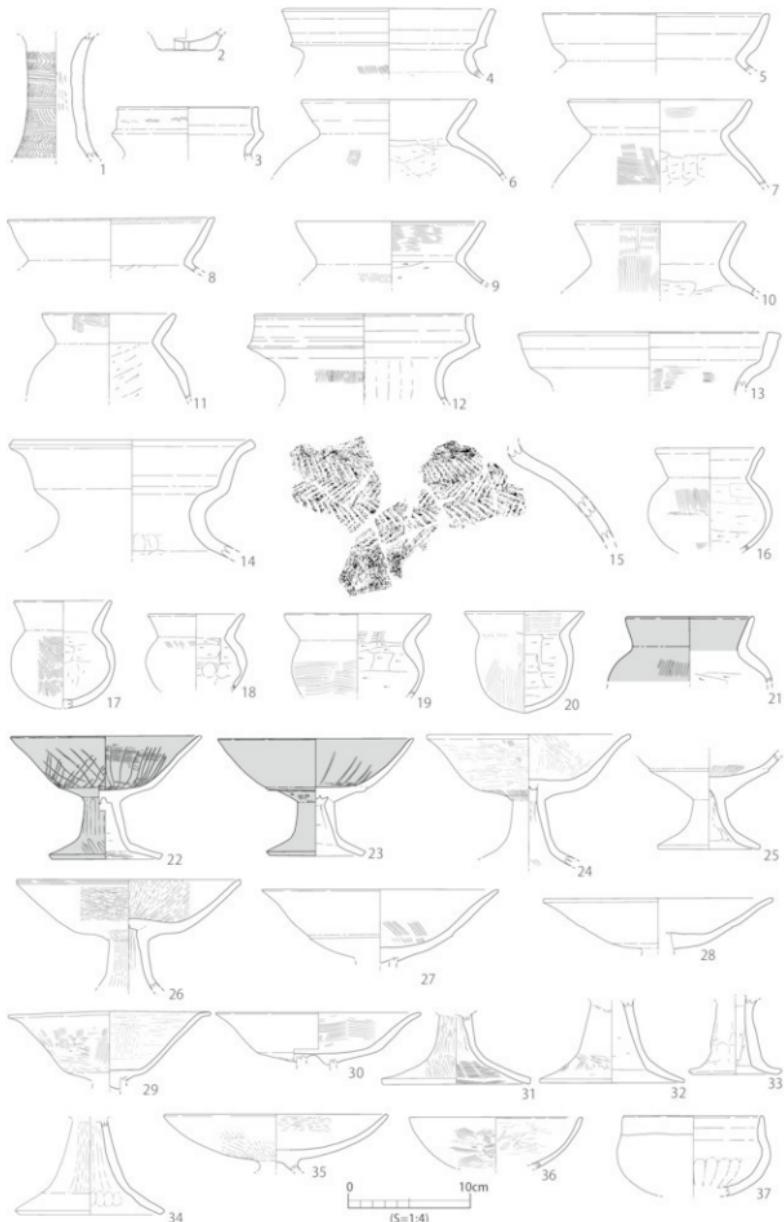
50～61は木製品である。50・51は三稜式木鎌で、52は欠損部位が多く、つくりも粗いため断定できないが、その可能性があるものである。後述するが、V層では弥生時代後期後葉～末頃の土器などと共に三稜式木鎌が出土しており、これらは本来はV層に含まれていたものかもしれない。53は棒状の木製品で、蒲鉾状の断面形を持つ。54～56は棹型田下駄の棹材とみられるもので、これらは同一地点で出土した。57は端部が小さくすぼまり、片面は凸面、もう一方の面は凹面になることから、舟形木製品の可能性があると考えた。ただし、凹面・凸面には明瞭な加工痕は残っておらず、断定はしかねる。58は矢板、59は細長い板状木製品である。60・61は棒状木製品で、60は蒲鉾状の断面形を持ち、先端が加工され、尖り気味になっており、61は圓面手前側に向かって次第に細くなるように加工されている。

出土遺物は古墳時代中期のものを主体としており、この時期に落ち込み周辺で人間の活動が盛んに行われたものと推測される。一部に古墳時代後期の遺物もあるが、これらは落ち込みの最終的な埋没時期を示すものであろう。

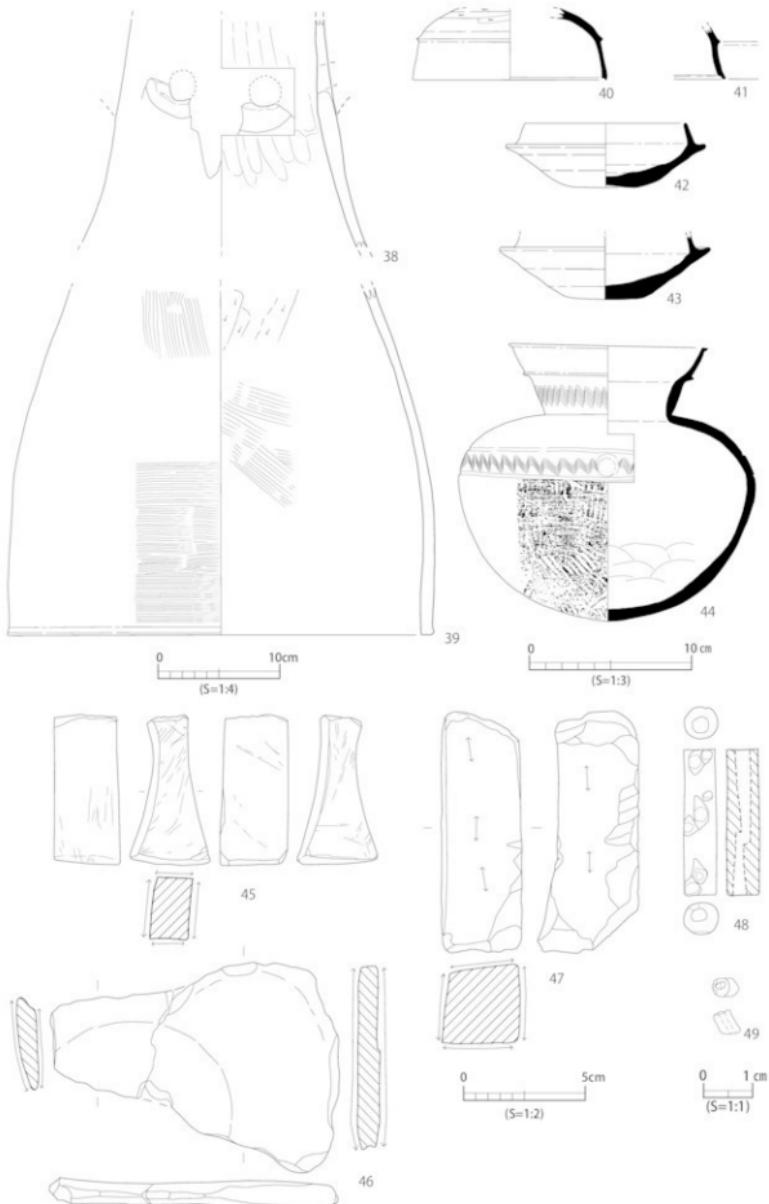
SK03（第175図） I15・I16グリッド、中央区の落ち込みの内側で、島状の高まりの東裾に位置する、長さ3.9m、幅1.4m、深さ0.18mの不整形な土坑である。埋土には黒褐色砂質土などが堆積し、小枝などの植物遺体を含んでいる。遺物は小片のため図示していないが、古式土師器の表片などが出土しており、この遺構の時期は古墳時代前期に遡る可能性もある。

SK04（第175図） H15・I15グリッド、中央区の落ち込みの内側で、島状の高まりの南東裾に位置する、長さ1.3m、幅1.17m、深さ0.25mの楕円形状の土坑である。埋土にはシルト質の層のほか、腐植土や粗砂も見られる。遺物は図示していないが、古式土師器とみられる器壁の薄い表裏部片が出土しており、この遺構の時期は古墳時代前期に遡る可能性もある。

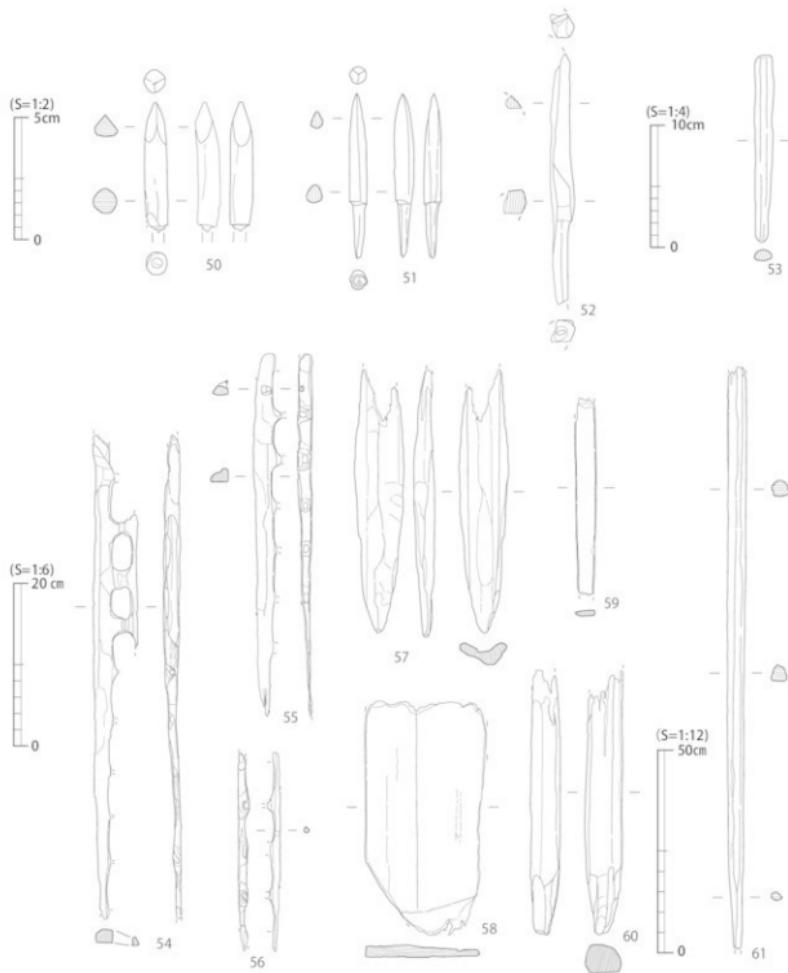
SK05（第175図） G14グリッドで、西区の西端に位置し、西側は調査区周間に掘り込んだ排水溝によって切られている。直径約0.8mの円形の土坑であったと推定され、深さは0.8mある。埋土は4層に分けているが、黒色粘質土やシルトが入り混じった堆積を示し、人為的に埋め戻された可能性が高いものと考える。出土遺物は土器の小片がわずかに出土したのみであり、この遺構



第172図 7区⑤落ち込み出土遺物（1）



第173図 7区⑤落ち込み出土遺物（2）



第174図 7区⑤落ち込み出土遺物（3）

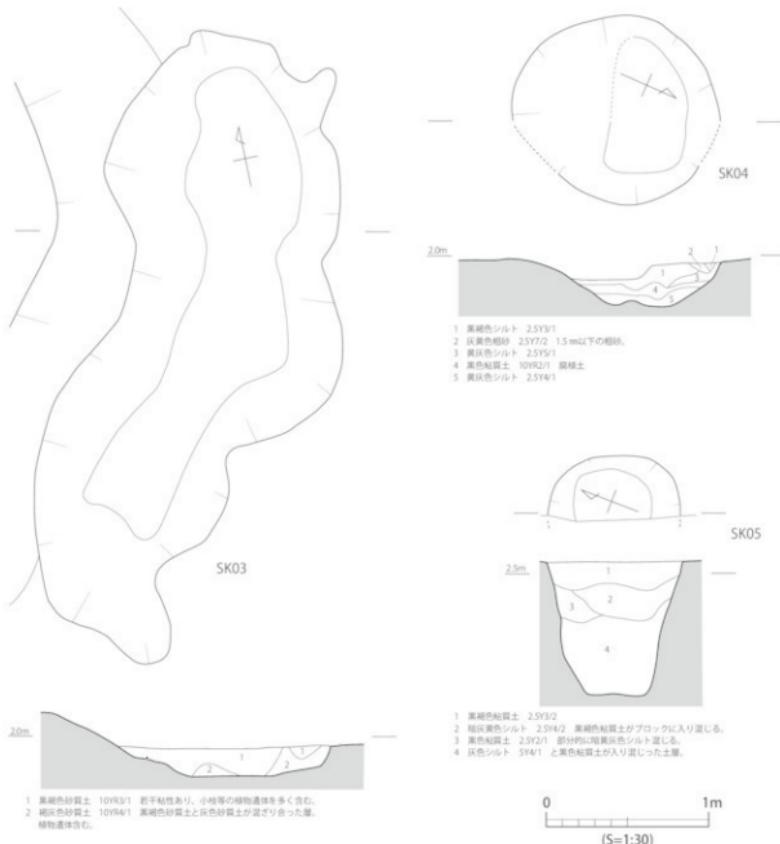
の時期を特定することはできない。

杭列1（第176・177図） I16グリッドで、SD04の北側に位置し、落ち込み内の遺物包含層を掘削中に検出した。東西方向に長さ4.2mで杭が立ち並んでいる。杭が打ち込まれた面を特定することはできないが、V層にはあまり深く刺さっていないことから、少なくとも落ち込みがかなり埋没した段階で打ち込まれたものと考える。なお、杭の1本について放射性炭素年代測定を行っているが、補正¹⁴C年代で1,430±30という結果で、発掘調査の所見とも矛盾しない。

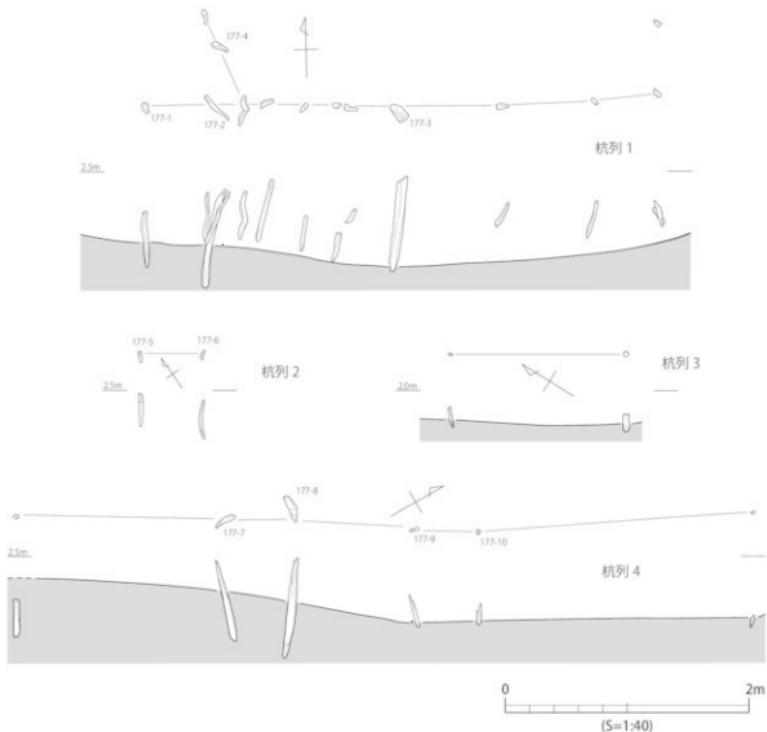
第177図1～4は杭列1に伴うもので、1・2・4は細い丸太状のものの先端を加工しており、3は太い木を分割した断面三角形状の材を用いている。

杭列2(第176・177図) I13グリッドで、西区の落ち込み内の遺物包含層掘削中に検出した。0.5mの間隔で2本の杭が立っているもので、杭列とするには躊躇されところであるが、ここでは一連のものとして記述する。杭の先端はいずれもV層上面には達していないことから、落ち込みがかなり埋没した段階で打ち込まれたものと考えられる。杭はいずれも径3cm前後の丸太状の材を加工したものである。

杭列3(第176図) I13グリッドで、西区の落ち込み内の遺物包含層を掘削中に検出した。1.4mの間隔で2本の杭が立っているもので、杭列とするには躊躇されところであるが、ここでは一連のものとして記述する。杭の先端はいずれもV層に刺さった状態であったが、どの段階で打ち込



第175図 7区⑤ SK03～05



第 176 図 7 区⑤杭列

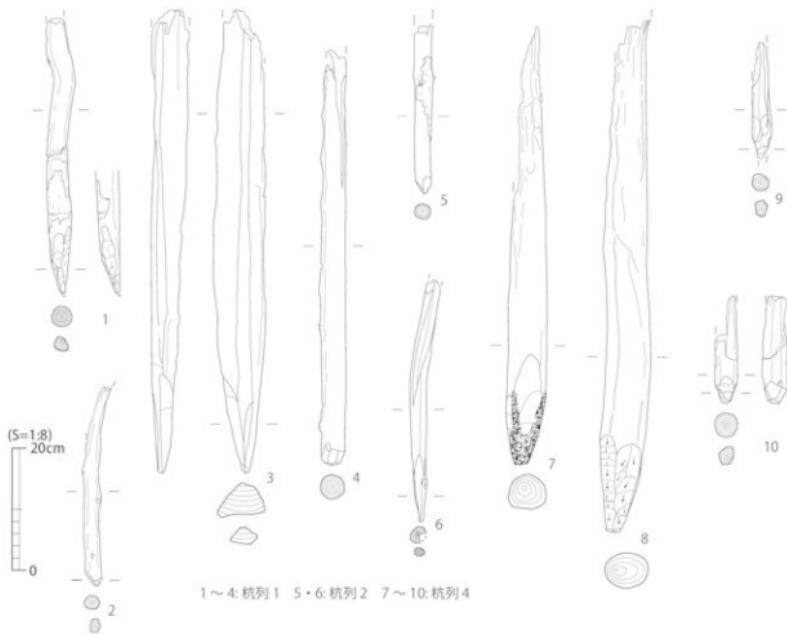
まれたのかは不明である。杭はいずれも細いの丸太状の材を加工したものである。

杭列 4 (第 176・177 図) 114 グリッドで、西区の落ち込み南側の遺物包含層を掘削中に検出した。南西—北東方向に長さ 6 m で杭が立ち並んでいた。杭が打ち込まれた面を特定することはできないが、V 層にあまり深く刺さっていないものもあることから、少なくとも落ち込みがかなり埋没した段階で打ち込まれたものと考える。なお、杭の 1 本について放射性炭素年代測定を行っているが、補正 ^{14}C 年代で $1,470 \pm 20$ という結果が得られ、調査の所見とも矛盾しない。

第 177 図 7 ~ 10 は杭列 4 に伴うもので、7・8 のように径 7 cm 前後のやや太めのものと、9・10 のように径 3 ~ 4 cm の細めのものがある。

② 遺構に伴わない遺物 (第 178・179 図)

1 ~ 5 は弥生土器である。1 ~ 3 は甌で、1 はほぼ直立する口縁部に 4 条の凹線が巡っており、V - 1 様式のものである。2 は口縁部に貝殻による平行直線文が入るもので、V - 3 様式に位置付けられる。3 は底盤の底部で、焼成後に穿孔されている。4 は甌で、口縁部に波状文が入る。V - 2 ~ 3 様式のものと考える。5 は器台で、内外面に赤色顔料 (水銀朱) が塗布されている。V



第177図 7区⑤杭列出土遺物

- 2様式に属する。

6・7は古式土師器の甕、8・9は土師器の甕である。6は口縁部が外反し、端部が丸みを持つもので草田4期に、7は口縁端部が面を持ち、外側に肥厚するもので草田7期に位置付けられる。8は外反する単純口縁のもので、古墳時代中期頃のものと思われ、9は口縁部と体部の屈曲が緩く、口縁部が垂直気味に立ち上がるるもので、古墳時代後期まで下るかもしれない。

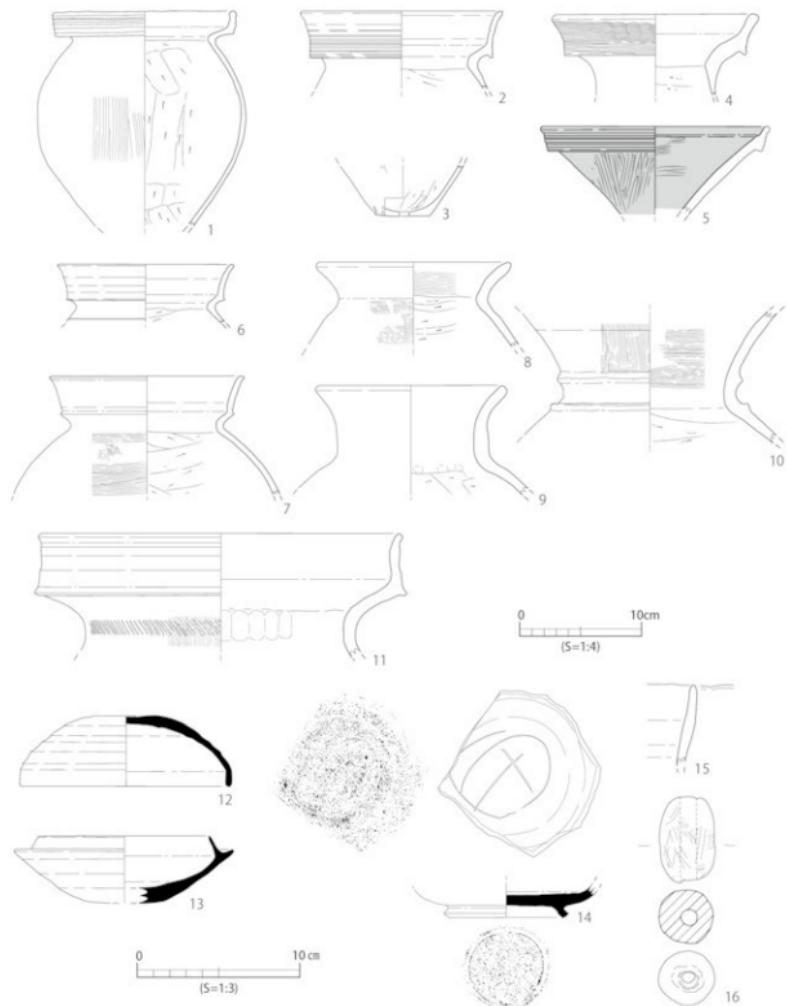
10・11は古式土師器の壺である。10は肩部から頸部にかけて2条の突帯が巡るものである。頸部に突帯を持つものは西部瀬戸内系土器に存在するが、下部の突帯が頸部付け根よりも下がった位置に巡ることや、胎土が在地のものと同じようなものであることから、西部瀬戸内系土器の影響を受けて作られたのかもしれない。11は口縁部が若干内傾し、頸部には刺突文が巡る。

12～14は須恵器である。12は環蓋、13は环身で、天井部や底部は回転ヘラケズリ調整がされていない。14は高台付环の底部で、底部切り離し技法は回転糸切りである。内面には、「○」の線刻がされたのち、さらにその中に「×」の線刻がなされている。

15は製塩土器で、砲弾形の焼塩壺と考えられる。

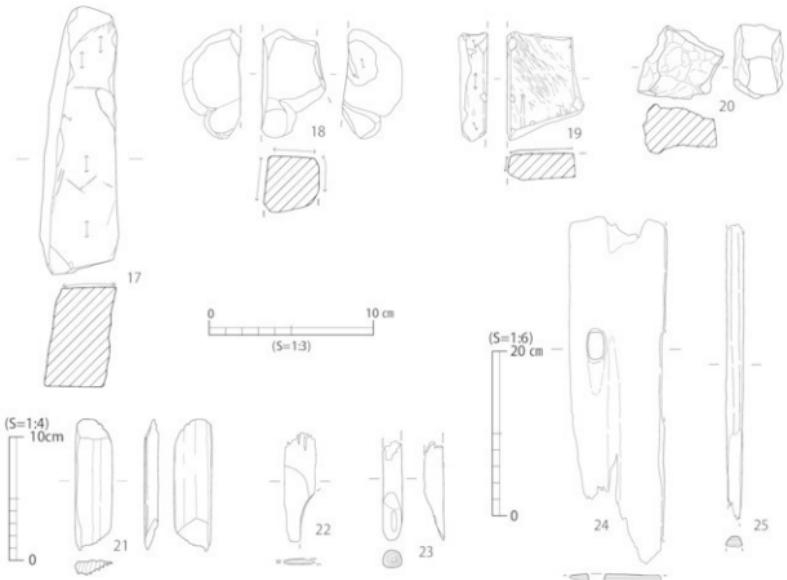
16は土鍤で、楕円形状の平面形を持ち、長軸方向に径1cmの穴が貫通している。

17～19は石製品である。17～19は砾石で、17は幅の狭い長側面1か所を砥面としており、18は3面、19は2面の砥面が残る。20は瑪瑙の原石で、図の右側面と上側面が剥離である。厚さは最大3cmで、ここから玉に加工するには小さいように思われる。



第178図 7区⑤中央・西区IV層出土遺物(1)

21～25は木製品である。21は両側の短辺が斜めに切断された木片で、木材の加工の際に生じた切屑であろうか。22は板状の木製品で、手前側は弧状にくびれたかたちになっている。羽子板状の形をしていた可能性がある。23は箆竹のようなものを斜めに切断したものである。24は板状木製品で、方形の孔が穿たれている。25は現状で断面が半円形の棒状木製品で、何かの柄として用いられたものかもしれない。



第179図 7区⑤中央・西区IV層出土遺物（2）

（3）V層の調査（第180図）

中央区では、調査区周囲の排水溝掘削時にV層の中から弥生時代後期の土器が出土した。このため、V層上面の遺構の記録を終了したのち、V層を面的に掘り下げ、遺物の出方や遺構の有無を確認することとした。排水溝では南側で多くの遺物が見られたため、南よりの約560mでV層の掘削を行った。また、西区でも調査区南よりのトレーナー壁面で弥生土器が認められたことから、V層上面の調査終了後、調査区の中央から南側の約220mを掘削し、遺物・遺構の有無を確認することとした。

調査の結果、遺構は確認できなかったが、弥生時代後期を中心とする遺物が一定量出土し、特に中央区の南東隅では弥生時代後葉の一括性の高い土器群を検出した（土器群1）。

掘削深度は、中央区では標高約1.4m、西区で標高約1.9mまで達しており、粗砂を主体とする層（第162図V-5層、第163図V-5層）も認められた。この層はほとんど遺物を含まないが、花崗岩に由来する粗砂であることから斐伊川の堆積作用でもたらされたものであり、6区の砂礫層（VI層）と対応する可能性がある。

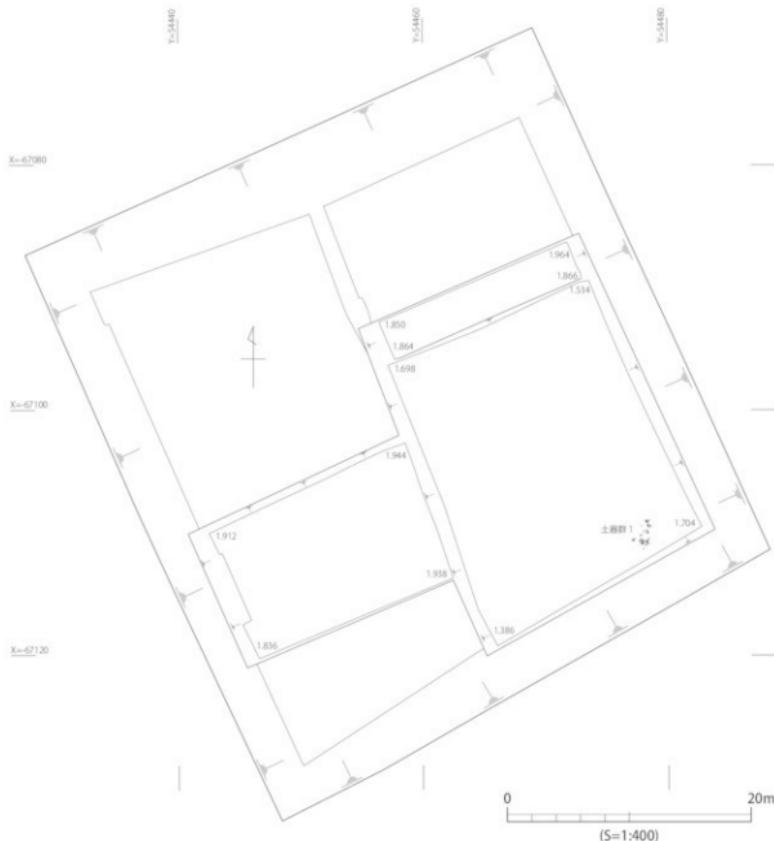
土器群1（第181・182図） 中央区の南東隅で、南北2.5m、東西1mの範囲で弥生時代後葉の土器が1か所にまとまって確認できた。遺物が出土したレベルは標高2.1～2.3mで、大きな高低差はないこと、完形に近い状態に復元できたものが多いこと、遺物は同一時期のものに限られていることから、これらは一括性が高いものと考える。また、土器群から東側に1.4mとやや離れた地点で土鍤が1点出土しているが、これも土器群の中に含まれるものととらえた。土器群

を検出した段階で周辺を精査したが、土坑・溝等の遺構は確認できなかった。

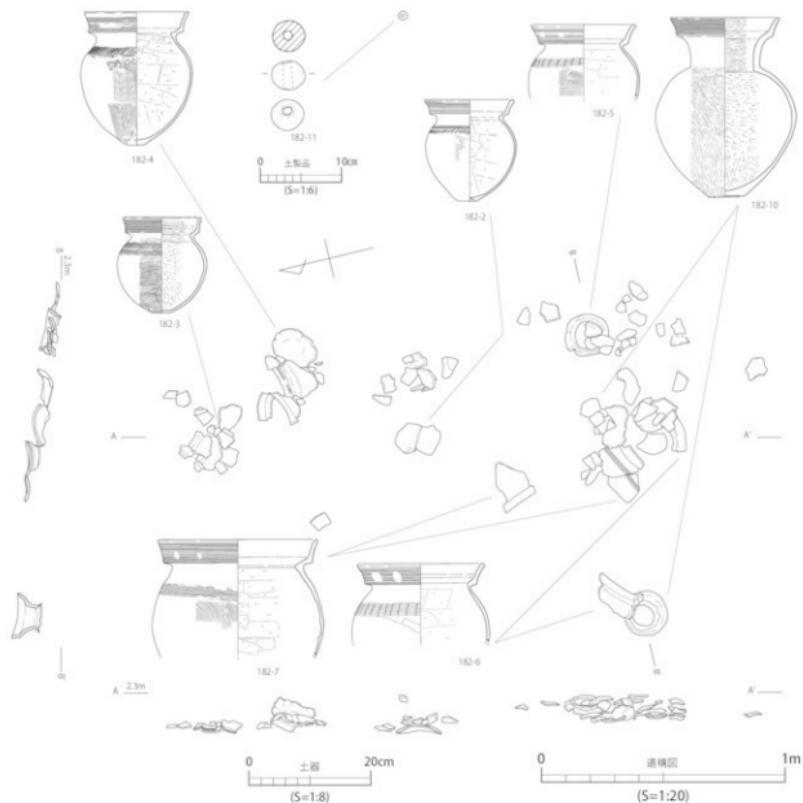
1～9は甕で、大きさから小型品（1～3）、中型品（4・5）、準大型品（6・9）、大型品（7・8）に分類できそうである。7・8は接点はないが、同一個体の可能性がある。口縁部にはいずれも貝殻腹縁による平行直線文が施され、肩部の文様は、1・3は貝殻による羽状文、4・9は貝殻による刺突文、2は貝殻による平行直線文と刺突文、5～7は貝殻による押引き状の波状文が見られる。10は甕で、口縁部には貝殻による平行直線文が施されており、体部は球形に近く、頸部は外反しながら長くのびるもので、やや珍しい器形をしている。1～10はいずれもV-3様式に相当するものと考えられる。

11は土鍤で、やや扁平な球形をしており、短軸方向に径1cmの孔が貫通する。

その他の出土遺物（第183・184図） 1～8は弥生土器の甕である。1は直立気味の胴部上半か



第180図 7区⑤中央・西区V層掘削範囲

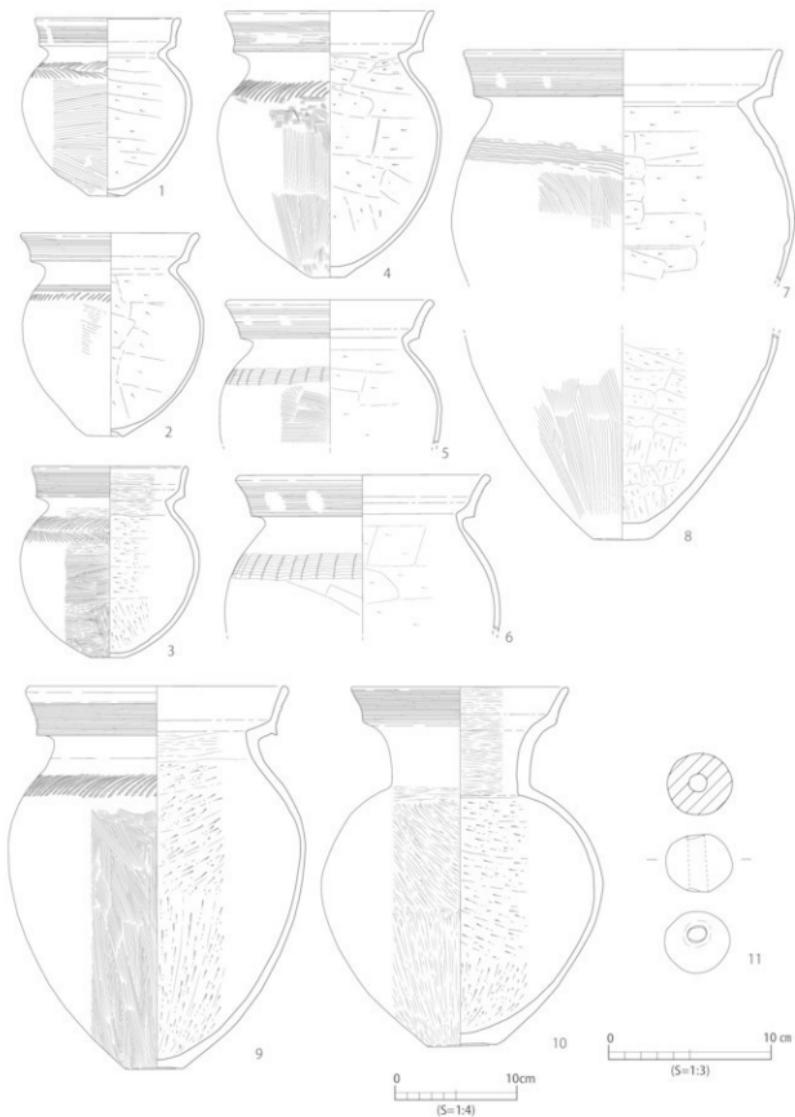


第181図 7区⑤土器群1

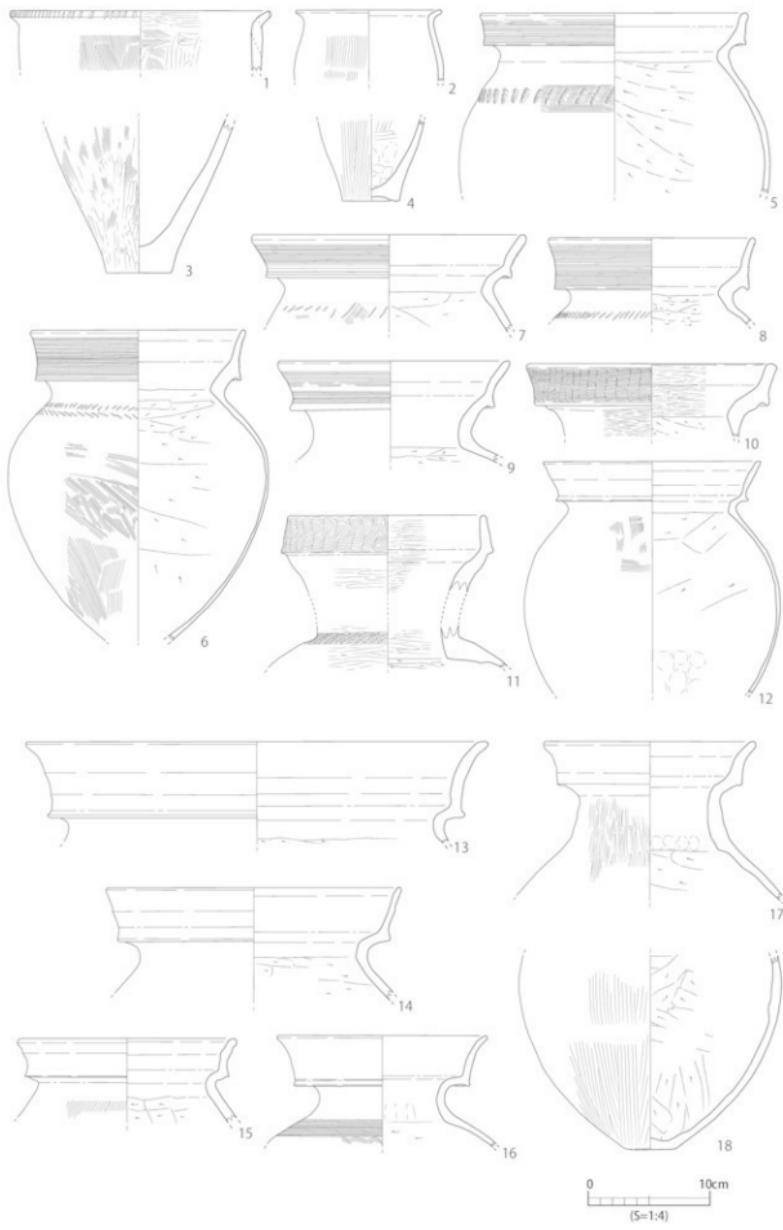
ら口縁部が外側に開くもので、口縁端部に刺突文が入る。I様式のものである。2は胴部があまり張らず、口縁部が短く開くもので、I～II様式のものであろう。3・4は底部から胴部下半が残るもので、体部はあまり開かずに立ち上がる。5は、やや外反気味に立ち上がる口縁部には平行直線文があり、肩部に刺突文が巡るもので、V-2様式に位置付けられよう。6～8は、5よりも口縁部が長く、外反度も強いもので、V-3様式に属するものであろう。

9～11は弥生時代後期の壺である。9には平行直線文が、10には間隔が密で、振幅の小さい波状文が施されている。これらはV-2～3様式のものと考える。11は内傾気味の口縁部に波状文が入るもので、頸部の付け根には貝殻刺突文が施されている。およそその器形は西部瀬戸内系土器と類似するが、頸部付け根に文様を持つことや、口縁部の細部に違いがあり、西部瀬戸内系土器の影響のもとで製作したものと推測される。なお、口縁部の波状文は上下交互に方向を変えながら施文されているが、こうしたものは在地でも、西部瀬戸内地域でも例を知らない。

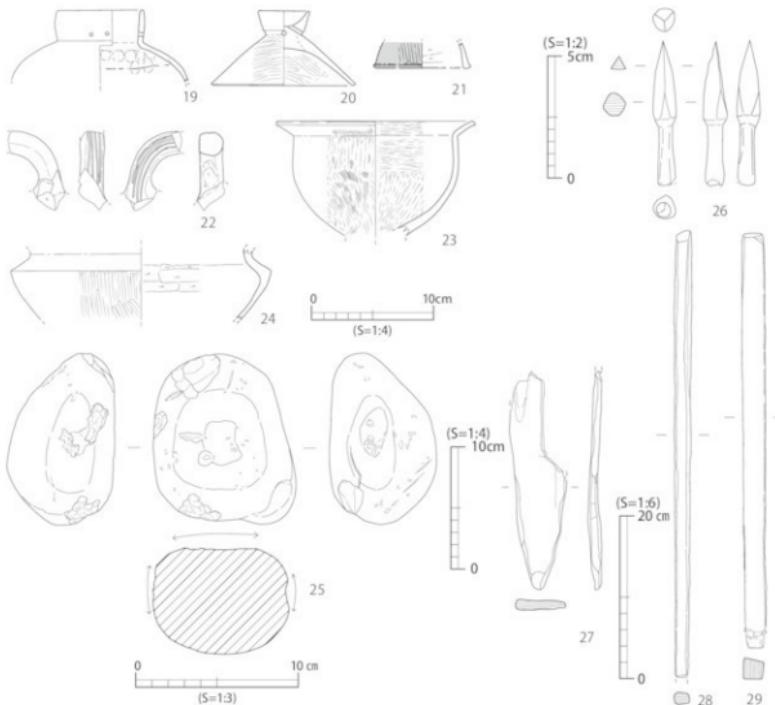
12～15は古式土師器の甕で、12～14は草田5期、15は草田3～4期のものと推定される。



第182図 7区⑤土器群1出土遺物



第183図 7区⑤中央・西区V層出土遺物 (1)



第184図 7区⑤中央・西区V層出土遺物（2）

16は古式土師器の壺で、口縁部は強く外反して端部が先すぼまりになるもので、草田4期に属する。17は口縁部が無文で、器壁に厚みのある壺で、頸部から体部上半には縦方向のミガキ調整がされている。在地の土器とするにはややイレギュラーな印象を受ける。18は壺の底部から体部下半が残るものである。

19は短颈壺で、口縁部に2孔1対の穿孔を持つ。20・21は蓋で、20はつまみに小孔が穿たれており、21は半球形の器形をしたものとみられる。21は外面に水銀朱が塗布されている。22は注口土器の把手で、沈線文が入る。23は脚付鉢で、口縁部が体部から屈折して開く。24は鉢と思われるもので、体部上半で屈折し、稜が張り出している。備後地方南部の神谷川式のものとの類似性が指摘されており、弥生時代後期前半から中頃のものとみられる。

25は磨石・叩石として使用されたもので、摩耗した面や敲打によるくぼみや剥離が見られる。

26～29は木製品である。26は三稜式の木鎌で、先端は鋭く尖り、稜もかなりシャープである。樹種はコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。27は板状木製品で、先端がすぼまるかたちに加工されている。28・29は棒状木製品で、断面形は方形になっている。

（東山信治）

1 伊藤実氏の御教示による。